

『PNFマニュアル（改訂第3版）』の読者の皆様へ

第2刷より，下記の記載内容の変更がありましたのでお知らせします。

（第1刷：2011年4月25日発行、第2刷：2012年8月20日発行）

[2012年11月9日]

頁	該当箇所	第1刷の記載内容	第2刷以降の記載内容
15	7. 抵抗	<u>Kabat (1961)<sup>25</sup> は，最大抵抗を使用することで弱化した筋への発散効果を最大にさせると指摘していたが，現在のPNFでは最大抵抗は中枢神経疾患の筋緊張を増大させることから，患者に応じた適正な抵抗量に変化している。しかし，非中枢神経疾患であれば最大抵抗が適応される。</u>	<u>最大抵抗を使用することで弱化した筋への発散効果を最大にさせることができる（Kabat, 1961<sup>25</sup>）。脳卒中のような中枢神経疾患でも同様である。</u>
26	㊦ 関節牽引	全短縮域で行う。	全可動域で行う。
30	㊦ 関節圧縮	終了域で行う。	<u>支持性を促通するときは，終了域で行う。</u>
31	㊦ 関節圧縮	短縮域の中間を過ぎてから行う。	<u>支持性を促通するときは，短縮域の中間を過ぎてから行う。</u>
97	図1 基本的ADLの発達段階	膝立て背臥位（hook lying）	膝立て背臥位（hook lying）